

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13852

研究課題名(和文)東京の文化と不平等に関する社会学的研究：社会調査に基づく理論構築

研究課題名(英文)A Sociological study on culture and inequality in Tokyo

研究代表者

磯 直樹 (Iso, Naoki)

慶應義塾大学・法学部(三田)・特別研究員(RPD)

研究者番号：90712315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2018年8月に実施したウェブ調査「東京都民の文化活動と社会意識に関する調査」を軸に、その準備・実施・分析という過程を経て進められた。このウェブ調査の実施は調査会社に依頼し、3090人から回答を得た。調査項目は、娯楽や文化活動の参加頻度、趣味で読む本の種類、芸術家の好み、音楽ジャンルの好み、映画ジャンルの好み、テレビ番組の好み、職業、学歴、所得、階層帰属意識、支持政党、社会意識、政治行動などである。その調査データを2018年から2019年にかけて分析し、理論的考察を行った。その結果、ピエール・ブルデューの界概念と社会空間概念を媒介する空間概念を理論的に再構成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来のSSM調査や社会生活基本調査よりも細かく文化活動と文化的嗜好に関する質問項目を設定した調査を行い、なおかつ『文化・階級・卓越化』などの海外の先行研究との比較も可能にした。加えて、日本の調査データに合わせた理論枠組みを構築することもできた。

研究成果の概要(英文)：A web survey has been central in this study. The survey is called "Survey on Cultural Activities and Social Values", designed by myself and implemented by a marketing research company. I analyzed the data from the survey and developed a theoretical concept of space based on Pierre Bourdieu's works.

研究分野：社会学

キーワード：文化 不平等 空間

1. 研究開始当初の背景

近年の階級分析・社会階層論において、ピエール・ブルデューの社会学は国際的な地位を確立している (Bosc 2011; Grusky 2015; Wright 2005)。日本の階級分析・社会階層論においても、ブルデューの学説は再生産論として受容され、今や古典的な地位を確立しつつある。近年では、ヨーロッパ諸国を中心にブルデュー社会学の再評価が進み、階級分析・社会階層論で定説のように扱われてきた解釈に重要な修正を迫る研究成果も出てきている。その中でも近年特に大きな論争をもたらした、イギリスの BBC の積極的関与によってイギリスは社会現象にまでなった研究成果が、トニー・ベネットらによる『文化・階級・卓越化』である (Bennett et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, London: Routledge.)。これは、階級と不平等を所得・学歴・職歴よりも文化の軸で捉える試みである。さらに、回帰分析と因果推論に基づく計量分析ではなく、多重対応分析と質的調査を組み合わせた方法を採用していることが特徴的である。

2. 研究の目的

本研究では、日本において経済資本・学歴・職歴だけでは捉えられない不平等を捉え、国際比較を通じて文化と不平等に関する理論的貢献を行うことを目的とした。そのために、文化資本を7つの文化領域から構成される文化「界」の資本の総称と再定義し、文化を軸に据えたウェブ調査を設計・実施した。こうして捉えられた「文化」と不平等との関わりを解明を試みた。対象地域は東京である。また、日本での調査結果は英仏を中心としたヨーロッパ諸国の事例と比較し、日欧一般に適用可能な文化と不平等の理論を提示することも目的の一つであった。

『文化・階級・卓越化』の著者の一人マイク・サヴィジは、BBCの協力のもとに **Great British Class Survey** という大規模な調査を行い、16万人から回答を得た。その成果は、ヨーロッパ諸国における学術的な階級分析・社会階層論において大きな論争を巻き起こしただけでなく、イギリスにおいては人びとの日常的かつ通俗的な階級観にも影響を与えている (Savage 2015)。『文化・階級・卓越化』の著者たちによって示された研究成果は理論的論争にも発展し、例えばイギリスの階級分析・社会階層論を牽引してきたジョン・ゴールドソープの理論と方法全般に対する批判も続けられている (Atkins 2015)。日本の階級分析・社会階層論は、主として社会階層と社会移動調査(以下、SSM)研究会の関係者によって担われ、SSMは階級分析・社会階層論において中心的な役割を担ってきた。ブルデューの学説も積極的に受容されてきた。従来の日本でのブルデュー社会学の応用は「文化資本」概念の理解を含め、理論と方法の両面で大きな欠陥がある。加えて、SSMの質問紙は文化の格差や文化による格差を測るには不十分であり、SSM調査に依拠したままではブルデュー社会学を応用して文化を軸に据えた階級分析・社会階層論を行うことがきわめて困難である。以上の点を踏まえ、日本の階級分析・社会階層論において、SSMの枠組みとは異なるブルデュー社会学の応用が試みられる必要がある。それがなぜかといえば、社会調査と歴史社会学の成果により、日本における不平等と社会階層が所得・学歴・職歴に基づく枠組みだけでは捉えられないことが示され、SSMでは測れない文化の働きを積極的に認める必要があるからである。例えば、永谷健(2007)は明治・大正期を中心に、実業エリートが所得と職業だけでなく独自の階級文化を共有していたことを明らかにしている。小針誠(2009)も同様の時期を扱い、「都市新中間層」と私立小学校の関係を明らかにすることで、両者を取り結ぶ階級文化の存在を示している。社会調査の成果として、知念渉(2012, 2014)は大阪市内のフィールドワークの成果に基づき、「ヤンチャな子」や「貧困家族」が所得・学歴・職歴などでは十分に説明できないことを踏まえ、彼らを取り巻く文化についてブルデュー社会学を応用しながら分析している。また、岡澤と團(2016)は東京都内で行ったサーベイとインタビュー調査の結果をブルデュー社会学の応用により分析し、「読書」をめぐる卓越化の存在とメカニズムを解明している。私も戦後日本における「正統文化」の特質を分析し、ブルデュー社会学を日本社会の分析に応用する場合の理論的・実証的問題についても論じてきた。国外に目を向けると、『文化・階級・卓越化』以後、ヨーロッパ諸国におけるブルデューの再評価により、文化を軸に据えた不平等と社会階層に関する研究が相当な影響力を有するようになっている (Coulangeon & Duval 2015; Hanquinet & Savage 2016)。したがって、ヨーロッパ諸国と日本の国際比較を行うには、SSMの意義は決して否定されないものの、SSMとは異なる形で文化を軸に据えたサーベイを行う必要がある。ヨーロッパ諸国との国際比較が可能になれば、日本の研究成果をもとにヨーロッパの諸事例を相対化しつつ、理論的貢献も可能になる。

3. 研究の方法

本研究の課題は以下の2点である。

- (1) 「文化」を7種類の文化領域に分節化した上で、各領域における行為者の位置が階級と不平等の形成にどう関わっているかをウェブ調査によって解明する。
- (2) ウェブ調査の結果を踏まえて英仏を中心に国際比較を行うことで、日本における文化と不平等の特質を理論的に解明するための課題を具体化する。

本研究は、(1)文化資本の理論的再定義と現代日本における7種類の文化領域の設定、(2)調査結果の分析と国際比較による理論構築、以上2点から構成される。このような研究計画を実施するために、1年目は英仏日の研究者と共同で調査設計を行い、ウェブ調査の質問項目を決めた。2年目は、ウェブ調査を実施し、データクリーニングとコーディング作業を行った。また、分析も開始した。3年目は、調査結果の分析を続けながら、理論構築の作業を行った。理論的にはブルデューの界概念を応用し、各文化領域を界と捉え、各々の特性が階級・不平等とどう関わるかを分析した。

4. 研究成果

本研究は、**2018年8月**に実施したウェブ調査「東京都民の文化活動と社会意識に関する調査」を軸に、その準備・実施・分析という過程を経て進められた。このウェブ調査の実施は調査会社に依頼し、**3090**人から回答を得た。調査項目は、娯楽や文化活動の参加頻度、趣味で読む本の種類、芸術家の好み、音楽ジャンルの好み、映画ジャンルの好み、テレビ番組の好み、職業、学歴、所得、階層帰属意識、支持政党、社会意識、政治行動などである。その調査データを**2018**年から**2019**年にかけて分析し、理論的考察を行った。その結果、ピエール・ブルデューの界概念と社会空間概念を媒介する空間概念を理論的に再構成することができた。

より具体的な理論的成果としては、界概念と社会空間概念を架橋する空間概念を、量的調査と結びつける中範囲の理論として定式化することができた。「読書空間」や「社会意識空間」などを調査データから多重対応分析によって構築し、こうした空間を理論的な基礎付けを与えることができた。他方で、先行研究との対比によって理論研究としての独自の成果を示すにはまだ課題が残っており、調査データについても本調査の反省と限界を踏まえ、無作為抽出によって得られるデータによって改めて検証する必要がある。こうした課題が明らかになったことは、本研究の成果でもある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 磯直樹	4. 巻 19
2. 論文標題 ピエール・ブルデュー 対象化する主体の対象化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 94-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 磯 直樹
2. 発表標題 Constructing a social space in contemporary Japan
3. 学会等名 CARME 2019 (Correspondence Analysis and Related Methods) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯 直樹
2. 発表標題 Pierre Bourdieu and statistical methods: reflection on the (missed) encounter of Sociology and MCA
3. 学会等名 East Asian Sociological Association (EASA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯直樹
2. 発表標題 Controversies over the Japanese tradition and formation of the art field in 1950 's Japan
3. 学会等名 13th Conference of the European Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 磯 直樹, 竹ノ下 弘久
2. 発表標題 文化と社会階層の多重対応分析: 2015年 SSM データを用いて
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 磯直樹
2. 発表標題 La culture legitime et la distinction dans le Japon contemporain
3. 学会等名 La distinction sociale : vers un renouvellement des analyses (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 矢澤修次郎 編 (磯直樹、他4名)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 256
3. 書名 『再帰的 = 反省社会学の地平』	

1. 著者名 トニー・ベネット (著), マイク・サヴィジ (著), エリザベス・シルヴァ (著), アラン・ワード (著), モDESTO・ガヨ=カル (著), デイヴィッド・ライト (著), 磯 直樹 (翻訳), 香川 めい (翻訳), 森田 次 朗 (翻訳), 知念 涉 (翻訳), 相澤 真一 (翻訳) (担当:共訳)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 560
3. 書名 『文化・階級・卓越化』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----